

## 新美南吉「権狐」論

水沢不二夫

【キーワード】「赤い鳥」、「こん狐」、草稿、知多半島、妖狐、動物報恩譚、唐辛子、童話、童心主義。

【要旨】新美南吉「権狐」は作者の故郷の民話・民俗を基盤としつつ、狐を神の使者として崇敬／畏怖する意識を解体し、縁起譚から近代童話への転換を果たしている。

### 一 雑誌「赤い鳥」と新美南吉

「権狐」は新美南吉のノートに残された「こん狐」の草稿である。「権狐」には「赤い鳥に投ず」というメモがあり、雑誌「赤い鳥」の一九三二年（昭和七）一月号に「こん狐」と改題されて掲載された。両者は本文の異同も著しく、「こん狐」には「赤い鳥」の編集者の鈴木三重吉の手が入っているものと推定されている。

この改編については極めて慎重に扱われて来た。たとえば保阪重政は

て、一頁だって私の表現をくぐらないものはありません」（一九三二年六月三十日「堤文子宛書簡」）と述べている。また「こん狐」掲載の雑誌「赤い鳥」一九三二年（昭和七）一月号の編集後記にあたる鈴木三重吉の「講話通信」の欄にも「満一周年を迎へて」と題されて次のようにある。

手元で材料を集めますのですが、そのためには、作家以外の方々のものには、私が一々手を入れますので、ほかの雑誌とちがつて、すべてのお話の表現が光りとのつてゐるかとおもひます。どうか多くの方々から、おもしろい話材をお送り下さいますやうお願い申します。（傍線稿者）

三重吉がこのように述べている以上、三重吉が職業作家ではない南吉の原稿に手を入れたことは確定してよいであろう。三重吉にとっては南吉など読者の投稿は「おもしろい話材」でしかなかったのである。草稿「権狐」と「赤い鳥」版「こん狐」との大きな相違の根源はここにあるだろう。

また、南吉が「赤い鳥に投ず」るにあたり浄書した際に加えた推敲は草稿「権狐」にも記録されたと考えべきではないだろうか。「応募の注意」には「原稿は一さい返送いたしません」ともあるが、作者としては最高の状態に完成させた浄書稿の控を手元に残しておきたいのではないだろうか。三重吉による推敲の存在が確定できた以上、「赤い鳥に投ず」という作者南吉の記述

『赤い鳥』の掲載に当たっては、主宰する鈴木三重吉の添削が行われたというのが、伝説的になっている。

「権狐」を、「赤い鳥に投ず」べく原稿用紙に転写する際には、ふたたび、かなりの推敲が加えられたのではないかと推定している。つまり、「権狐」を三重吉が添削した可能性と、南吉が投稿した原稿が「権狐」とは別に存在した可能性とがあつて慎重にならざるを得ないのである。

しかし三重吉は「毎号一冊の童話全部をかくか書き直すかし

を積極的に疑うべき材料が新たに出ない限り、草稿「権狐」を投稿原稿の記録とみたい。

また、南吉はすでに「赤い鳥」に「正坊とクロ」「張紅倫」が採用されていた。「正坊とクロ」では売られてきたらしい少年や娘が、「張紅倫」では虐げられた民衆（中国人）が設定されていた。「正坊とクロ」と「張紅倫」とには共通して軍隊に対する揶揄が潜んでいた。そして「権狐」には「兵十」という「兵」の字の入った人物が登場するのである。南吉への徴兵検査（身体検査）の結果についての資料を見ないが、南吉は一九三一年（昭和六）には岡崎師範学校を受験し、身体検査で不合格になっていた。したがって、軍隊に対するアンビバレンツな思いが南吉に存したことは想像に難くない。

### 二 「権狐」の語られた場

「権狐」は新美南吉が母校の愛知県の半田第二尋常小学校の代用教員をしていた一九三一年（昭和六）初夏の執筆であつたらしい。当時の教え子の証言に拠れば梅雨のために体育の授業ができなかった時に教室で身振りを交えて語られたものであった。すなわち「権狐」は教え子という極めて少数の限定された享受層に向けて発信された物語という側面をも有していた。たとえば序章の「茂助と云ふお爺さんが、私達の小さかった時、村にゐました」という語りには「村」という限定された空間の共有性が刻印されている。また「私達」という語り手の設定は「権狐」が集落において伝承されてきた物語であるかのように思わせる効果がある。

「権狐」のモデルは二説あって、地元の南吉研究者の大石源三

は  
「こん狐」は、昭和四年の「親無狐」や童謡「小狐」「六蔵狐」などともかわりがあると思われる。

六蔵狐は、昭和のはじめまで、岩滑の宇芋畑、深谷、しんたのむね付近にいた狐で畑仕事をしている村人のそばまで寄つてきたり、食べ物をあさりにくる老狐で、「タバコ入れを届けてくれた狐」という民話として今も岩滑に伝えられている狐である。

この六蔵狐が、芋畑の村で死んでいたのを榊原大三郎が家に持ち帰り、屋敷内に手厚く葬ったりさらに芋畑の村の持主たちが、六蔵稲荷のほこらを建てたりして、村中とむらったという狐である。今もこの林は「狐塚」として残っている<sup>註五</sup>。

とし、南吉の幼なじみで「権狐」の「中山の殿様」（一）の子孫の中山文夫は

知多半島の、ちょうど中央の四囲、山にかこまれた大興寺村は、戸数百にみたない平和な村です。その村の東の端に、「鐘つき池」という池がありました。その池の周囲を松の丘がとりかこみ、その池の水は山清水をたたえて、とても深く澄んでおりました。池の底には水葦がはつきり見え、ときに

は紫色に見えたりして、恐ろしいぐらいでした。この池に夕風がふきはじめると、池の底から「こんこん」と、鐘の音が聞こえてくるのです。科学的にいえば、周囲の松をわたる夕風が、池の面に反響するわけです。しかし村の人々は、これはキツネが打つ鐘の音だと、いい伝えておりました。そしてそのキツネを、「こんぎつね」と呼んでいました<sup>註六</sup>。

と述べている。

大石源三の証言の話素は時期は少し後になるが、一九三四年（昭和九）十二月二十日の「赤狐」という南吉の詩にも受け継がれている。「赤狐」は

向かひ山の林で赤狐が鳴いた。

青い月夜にや煙草ほしやと鳴いた。

煙草持っていたら酒がほしやと鳴いた。

酒を持っていたら辛子がほしやと鳴いた。

種子島持っていてどんと撃つてのけよか。

（改行を適宜省略——引用者注）

という短い詩である。話素の「狐」「煙草」は証言と一致し、「狐」「月夜」「辛子」「種子島（火縄銃）」は「権狐」と一致している。「書く」となるとまるで知らんことは書けん<sup>註七</sup>とする作者の発言をもとに材源を単純に特定してよいのなら、大石源三の証言に信憑性があるように思われる。しかし、中山文夫の「こんぎ

つね」の名称由来の解明も重要であって、一方の説を二者択一的に排さねばならないということもないであろう。それよりも気に掛かるのは未解明の素材がまだまだ他に潜在している可能性である。やはりその掘り起こしはなされねばなるまい。

たとえば「権狐」の「権」には「仮の」という意味があって、「権現」など明治以前の神仏習合時代には神号に盛んに用いられたものであり、「権狐」は宗教性のまわりついた表現であった。南吉の家やそこから百メートルほど西方の岩滑八幡社（当時は村社）、これに隣接する浄土宗常福院などの背後を流れる「権狐」冒頭の「背戸川」（矢勝川）の対岸には権現山がある。「赤い鳥」版「こん狐」では一貫して「権」の表記はひらがなへ変えられているが、草稿「権狐」を読み解くためにはこの「権」の漢字表記は無視できない。「権狐」には「栗や、木の子や何かをくれる」行為を「神様のしわざ」（四）と解する場面もあるからである。

### 三 「権狐」の「いたづら」の位相

序章は「私が次にお話するのは、私が小さかった時、若衆倉の前で、茂助爺からきいた話なんです。」の一文で終えられる。<sup>わかいしやうぐら</sup>「若衆倉」も作者新美南吉の実家近くの八幡社（現、愛知県半田市岩滑中町の境内に実在していたものであった。そしてこの八幡社は明治の神仏分離までは隣接する浄土宗常福院と一体のものであった。『半田町史』にはこの八幡社の「例祭は八月十三日、十四なりしが、晩近之を四月五日、六日に改む」とあり、例祭が大分県の宇佐八幡と同日に行われていたことを確認することが出

来る。八幡社の例祭は各地で放生会と称されて来たが、明治初年の神仏分離により仲秋祭などと改称され、仏教の殺生戒に基づいて生物を放つ祭儀は衰退したが、知多半島では「虫供養」という同種の祭儀が行われていた。これは「生物の生命を絶たす事を懺悔して念仏を授けその生命を絶つたものに死後の福を生せしめやうとはかるもの」であり、「当番の村の寺堂もしくは神社によしず張りの道場を建てて念仏を唱える」ものであった。そして「南吉在世の頃の岩滑では旧八月十五日の虫供養と同じ日に」四遍供養・四遍念仏として行われていた。<sup>註八</sup>

一方、「権狐」には

権狐は、ふといたづら心が出て、魚籠の中の魚を拾ひ出して、みんなはりきり網より下の川の中へほりこみました。どの魚も、「とぼん！」と音を立てながら、にぎつた水の中に見えなくなりました。（中略）鰻をすてゝ逃げようとした。けれど鰻は、権狐の首にまきついてゐてはなれません。

（一一）

とある。南吉の「文芸自由日記」（一九三〇年三月十六日）の「幼い時の思ひ出」には南吉が「どぜうを捕まへて来ると、殺生の嫌なお父さんは、小川へ逃がして来いと云ふのでした」とあり、漁撈を「殺生」として捉える意識が存していたことを窺わせる。「権狐」の時空は「徳川様が世をお治めになつてゐられた頃」であり、漁師・猟師は近世には「村明細帳」（村鑑帳）などに

「殺生人」と記されることがあった。また岩滑の八幡社で放生会が行われていたか否かについては今回の調査では明らかにできなかったが、「権」の魚を逃がす行為は放生的行為へと反転し得ることを確認しておきたい。なお、大里恭三郎は魚を逃がしたことにについて「この不殺生は極めて人間的な考えに立脚した行為」と評している。

また「権」の住まいは「洞をつくつて、その中に住んでゐました（一）」とされ、計六回にわたって「洞」と表現される。これは「赤い鳥」版「こん狐」では「穴」へと変えられ、木村功は「洞」は岩や大木にできた空洞をいうので、「作つた」は誤りと考えられ「穴」に改められた」と解している。たしかに現代の『広辞苑』（第四版）では「洞」（ほら）は「崖や大きな岩・大木などの、中がうつろな穴」とされている。しかし、「作つた」という表現に沿うように「洞」は「ほこら」と読めないだろうか。「洞」は洞と通音し、「権」の住まいには神をまつる小さなやしろのイメージが潜在しているのではないだろうか。「洞」を「ほこら」と読む例は菊池寛「恩讐の彼方に」など、複数の作品に確認することができる。

また、「権狐」には「お念仏」の語も登場する。「念仏」は浄土宗系の「南無阿弥陀仏」の称名であり、前掲の浄土宗常福院の存在と一致する。なお、南吉の家は岩滑の八幡社の南南西二十メートルほどのところにある浄土真宗大谷派の光蓮寺の門徒であった。

さらに「権狐」には各種の祭儀・民俗を背景としているらしい

なり強く予測させはするものの、必ずしもその死は明示されていない。放生においては「鰻」を放つ行為は「放し鰻」と称され、「放し亀」「放し鳥」とともに代表的なものであり、少なくとも「権」の鰻を放つ「悪戯」の反面には鰻を助けようとするものも存していたことを確認しておきたい。

「権」による放生的行為から「十日程たつて（二）、「兵十」の母親の葬儀が行われる。墓場には「彼岸花が赤いにしきの様に咲いてゐて」「権」はそこに潜んで様子を見ている。彼岸花は理由は不明であるが、愛知県南知多地方では「ギツネバナ」とも称されるものであり、「権」と彼岸花との組み合わせはこの地方では類型化された表現と考えることができる。ただし、たとえば蒲原有明「夢は呼び交す」に「彼岸花、天蓋花、死人花、幽霊花、狐花などという、あまり好ましくない和名が民間に行われている」とあるように負のイメージであったものが、南吉によって美しいイメージで語られていることにも注目したい。

#### 四 「権狐」の時空

「権狐」には「月のいゝ晩に、権狐は、あそびに出ました」（四）とある。「権」による前述の放生的行為が陰暦八月十五日の仲秋の名月（芋名月・十五夜）の頃とすれば、これは陰暦九月十三日の栗名月（豆名月・十三夜）の頃として読むことができるよう。

十五夜・十三夜の両日の晩に限っては他人の畑の芋を勝手に取ってもかまわないという不文律が日本の各地にあった。「権」

記述が重出する。

たとえばこのあと鰻を首に巻き付けたまま家へと逃げ帰った「権狐は、ほつとして鰻を首から離して、洞の入口の、いささぎの葉の上にのせて置いて洞の中にはいりました。」（「一」）と記されている。ここに記されている「いささぎ」とは「ヒサカキ」（非神・姫神）の方言であり、南吉のいた愛知県知多半島でも「丘陵から社寺林まで幅広くみられ、さらにこの枝を仏花に添えて使うなじみの木として知られている」ものであった。また「非神」は「神」に似た植物でその代りにも用いられる。神道では神棚などに供され、毎月の一日と一五日とに新しい枝と取り替える習俗のものである。ツバキ科の常緑小高木であり、自然の状態では鰻を「葉の上にのせて置いて」という状態はあり得にくい。ここでは「権」が稲荷信仰と縁のある狐であることと相俟って、神に供えられたもののイメージが喚起せられる。「権」の住む「洞」の前のヒサカキの葉の上に「鰻」が置かれているという映像はあたかも穴施行・野施行などと称される野生の狐の穴の前への供物のようでもある。なお、「赤い鳥版「こん狐」では「こんは、ほつとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはづして穴のそとの、草の葉の上にのせておきました。」となっている。積極的なうなぎを殺すシーンが加えられ、「いささぎ」（ヒサカキ）は消されている。我々は「こん狐」に先導されて「権狐」を読んでしまいう呪縛から解き放たなければならぬ。「権狐」ではさらに「鰻のつるつるしたはらは、秋のぬくたい日光にさらされて、白く光つてゐました」と静的なイメージで語られ、うなぎの死を

による「畑へ行つて、芋を掘つたり、菜種殻に火をつけたり、百姓家の背戸につるしてある唐辛子をとつて来たりしました」（二）という「悪戯」は両日のことではないが、通底するイメージがある。また、「栗の実が、いつもの様に、かためて置いてある」（五）のも、「鰻」が「家の中へ投げこんで」（三）置かれた状態と比べ、神饌としての「栗」を想起させ易い。

「権」の「芋を掘る」行為について安藤重和は「狐が実際には芋を掘って食べる」ことを指摘している。しかし「権」はこの「芋」を食したのであるうか。作品には「権」が何かを食するシーンが無い。これを「ひとりぼっちの小さな狐」による人間の行為の真似として読むことはできないだろうか。「権」の芋掘りは「悪戯」であって、食生活としては描かれていない。後の「唐辛子」も同様に食べるのであろうか。「芋」は人間が掘りに行つてみると既に少し掘つてあるという不思議な光景があるのである。「権狐」は農民文学的なリズムを尺度として読むべき作品ではないであろう。

「菜種殻に火をつけ」た行為もその用途を考えると、「赤い鳥」版「こん狐」に対する「悪戯の域を踏み越えた陰湿な悪意」というほどの極悪さを表面的には感じることはできない。菜種油のために「種を取り去ったあとが、『菜殻』『菜種殻』で、これを田の隅などで燃やすのが『菜種焚く』であり『菜種火』である。」という。用途は①燃やして灰にして肥料、②風呂などの焚き付け（灰は肥料）、③松明などである。雨などに濡れて燃えない菜種殻が干してある光景や、それを燃やす光景は農村では普通に見られ

たものであった。「権」が「菜種殻に火をつけ」たのはやはり「ひとりぼっちの小さな狐」による人間の行為の真似であったのではないだろうか。これもまた人間が火をつけに行ってみると既に燃えているという不思議な光景があるのである。

もちろん風が吹いて山火事にでも発展すれば人間世界はすべて灰燼に帰すであろう。「権」の放火は「陰湿な悪意」というよりもむしろ善悪を超越した破滅的な行為のように思える。問題はなぜ「権」がそのような「悪戯」をするのかということである。單純に国家権力の推奨した勸善懲惡譚<sup>注二七</sup>として読むべきではあるまい。「権」は「ひとりぼっちの小さな狐」として設定されており、まさにこの設定こそが「悪戯」をする理由なのではないだろうか。「ひとりぼっち」で寂しいから「悪戯」をするのである。ではなぜ「権」は「ひとりぼっち」なのであるか。「権」は最後には「兵十」の「銃」で撃ち殺されるのであるから、「権」の親も同様に殺されたのであろうと想像することは深読み過ぎるであろうか。しかし、さもなくば「小さな狐」の「権」が「狐火」を操る怨念を抱えたような「妖狐」として登場したことの説明がつかない。

「狐」は日本の物語では人間に害悪をもたらす「妖狐」として、あるいは人間に恩を返す動物報恩譚の主人公の「神狐」として語られてきた。「妖狐」はたとえば巖谷小波「がね丸」に「聴水」という名で登場する。「がね丸」は一八九一年（明治二四）のものであるが、昭和期に入っても広く読まれていた。たとえば出版業界では昭和初年に改造社が一冊一円のいわゆる円本として

『現代日本文学全集』の刊行が開始され、「がね丸」は一九二八年（昭和三）発行の第三十三巻の巻頭に鈴木三重吉の編集によって収載されていた。そして「がね丸」には「権狐」と同じく「烟」（島・鰯）に関わる記述がある。「がね丸」の「妖狐」は「里の方へ出て来つ。此処の島彼処の<sup>おれ</sup>厨と、日暮るるまで<sup>おれ</sup>求食り」、「塩鮭干<sup>はしか</sup>鰯米<sup>いしな</sup>などを、車に積て運び来りしが。彼の大藪の陰を通る時、一匹の狐物陰より現はれて、わが車の上に飛び乗り、肴<sup>さかな</sup>を取て投げおろす」という悪行をなしている。「権」はこの「がね丸」の「聴水」という「妖狐」をも意識して造形されたと見てよいであろう。

「妖狐」は民間信仰においては「狐憑き」として畏怖され、行者・神官などは「狐憑き」の退治のために「唐辛子」をいぶしたり、棒で叩いて憑きもの落としを行った。また、唐辛子や剃刀を持つていると狐憑きの予防となるともされており、「唐辛子」はいわば「妖狐」の天敵だった。この「唐辛子」を「権」は平然と「とつて来たり」してしまうのである。この設定によって「権」は「妖狐」性が背後に追ひやられ、読者に愛され得るかわいい主人公として立ち現れてくる。またこの設定には祈禱の否定を伝統的な宗旨とする浄土真宗の世界観の反映もあろうが、それは同じく祈禱を否定する近代的な意識と一致して、民話・説話から近代の童話への転換を可能にしているのである。

## 五 兵十の視点から読む物語世界

「兵十」は「百姓」（四）とされているが、前述のように漁師・

が見える。それは「母」のための「鰻」を盗んだ「狐」であった。「兵十」は「火縄銃」で「権」を撃つと、「背戸口」に、栗の実がいっもの様に、かためて置いてある」のに気づく。そして「神様のしわざ」と思っていたことが「権」のしわざであったと理解し、思わず手にしていた「火縄銃」をぱたり落とし「て物語は終わる。

物語はここで終わるのであるが、この後、「兵十」はどのように生きるのだろうか。そして「兵十」のこの体験はどのようにに物語化され、冒頭の「私が小さかった時、若衆倉の前で、茂助爺からきいた話なんです」という語りに連なっていくように仕掛けられているのだろうか。

「権狐」は語り手の「茂助爺からきいた話」として仕掛けられているのであるから、「茂助」も「兵十」本人か誰かから聞いた「話」という設定であり、「兵十」がこののち「権」を「神」として祀るであろうことも容易に想像できる。しかし同時に読者には「いつそ神様がなけりやいゝのに」（四）という「権」の内言によって「権」が「神」の化身でも「神」の使者でもないことが明示されており、ここにおいても民話的縁起譚・説話から近代的な童話への転換がなされていたと見たい。

注

注一 保阪重政『新美南吉を編む』二〇〇〇年、アリス館、一五四～五頁。

注二 『校訂新美南吉全集③月報』（一九八〇年、大日本図書 二七頁）の注は「当時岩滑新田（現・半田市平和町一丁目七番地）に江端兵十が住む」とモデルの存在を指摘している。

注三 神原二象の証言。所収『校訂新美南吉全集③月報』一九八〇年、大日本図書。

注四 委細は拙稿「新美南吉「こん狐」における鈴木三重吉の改稿の位相」（東海大学日本文学会「湘南文学」一九九四年三月、二八号）参照。

注五 大石源三『（改訂版）「こんぎつねのふるさと」一九九三年、エフェー出版。なお、「狐塚」は一般名詞としては「狐を神としてまつた祭場としての塚」（中略）柳田国男は狐塚が本来は田の神の祭場であったと推測している。」とされている（『日本民俗大辞典（上）一九九九年、吉川弘文館、「狐塚」の項）。

注六 中山文夫「私のこんぎつね」「新美南吉研究」1号。『新美南吉全集童話集Ⅰ』アリス館牧新社、一九七五年、付録。

注七 新美南吉「見聞録」一九四〇年（昭和15）十一月二五日。

注八 『校定新美南吉全集②』（一九八〇年・大日本図書・一四三頁）の語注は岩滑の八幡社の北東側にあった宝蔵倉で祭礼の幟や笛、太鼓などの保管場所であったとする。しかし、「若衆倉」という名称との結びつきが不明である。佐藤嗣男は「岩滑に関係のない読者にすれば若衆宿を連想するというほうが大方ではないだろうか」とするが、岩滑においても明治以降に衰退した若者組や若衆宿との関係が予測される。岩

滑の南方の半田市堀崎町（上半田北組）には若衆倉が現存し、北方の阿久比町の浄土寺跡には古老の「わしら若いが若いころには“若衆蔵”があつて草木の西側に住む若者が集まって祭り太鼓の練習や芝居を楽しんだなあ」（『阿久比町広報』二〇〇六年十一月一日）という証言がある。

注九 愛知県半田町編『半田町史』一九二六年、一二五頁。

注十 『知多郡史（上）』一九七一年、愛知県郷土資料刊行会、四八八頁。

注十一 同前。

注十二 斎藤寿始子「ふるさとのこころ——新美南吉と宗教性」『校定新美南吉全集①』『月報』一九八〇年、大日本図書。

注十三 坂本要「知多半島の虫供養大念仏と真宗和讃（2）」『東京家政学院筑波女子大学紀要』第四集、二〇〇〇年。

注十四『校訂新美南吉全集⑩』一九八一年、大日本図書、四一六頁。

注十五 『校訂新美南吉全集②』（一九八〇年、大日本図書、二七頁）の語注に拠れば、岩滑八幡社の本殿わきの神明社の祭礼が九月十六日、十七日にあり、しかも相撲までもが行われているという。相撲は放生会とも縁の深い行事でもあり、放生会の名残を感じさせる。現在、石清水八幡宮の放生会は九月十五日、鎌倉の鶴岡八幡宮の祭礼は九月十五、十六日、明治初年の神仏分離によって鶴ヶ岡八幡宮から排除され、長谷（鎌倉市）の御霊神社に移された「面掛行列」は九月十八日に行われている。

注十六 大里恭三郎「『こん狐』論——擬人と自然——」（『常葉

国文』一九八七年六月。

注十七 木村功「新美南吉「権狐」論——「権狐」から「こん狐」へ——」（岡山大学教育学部研究集録）百十一号、一九九九年七月。

注十八 『広辞苑』などの一般的な辞書には「洞」に「ほこら」の読みはないが、たとえば国枝四郎「甲州鎮撫隊」には「滝のかかっている岩組の背後を洞（ほこら）にこしらえ、そこへ隠して置く」という用例がある。他に小栗虫太郎「紅毛傾世」、織田作之助「聴雨」、海野十三「幽霊船の秘密」などにも「洞」を「ほこら」と読む例がある。

注十九 この地域では「ヒシャシャギ」という発音がある。鈴木規夫編『愛知県南知多方言集』一九七六年、国書刊行会、六五頁参照。

注二十 浜島繁隆『知多半島の植物誌』二〇〇六年、トンボ出版、七七頁。

注二十一 「狐や狸などの野の獣に対し、寒中餌食の欠乏した時に、小豆飯や油揚げなどを夜間田畑の畦畔に持って行って捨てておき施し与えることである。野施行は野に捨てておくことであり、穴施行は穴のほとりに捨てておくことである。」（『日本大歳時記冬』一九八一年、講談社、一九八頁。）

注二十二 四章では「権」は「松虫」の鳴く側らでじつと人間（兵十・加助）が通り来るのを待つ。このような「古今集」的な掛詞の援用もあるため、「月のいゝ晩」は「月見」にふさわしい日と考えられる。

注二十三 西角井正慶編『年中行事辞典』一九五八年、東京堂出版、芋名月、豆名月の各項参照。

注二十四 安藤重和「「権狐」成立試論」（『愛知教育大学研究報告』三七号、一九八八年二月）。

注二十五 濱森太郎「『こんぎつね』の消された境界」日本文学協会「日本文学」三三巻八号、一九八四年八月。濱は「こん」の悪戯は、悪戯にしては陰険すぎる。村人は怒っている。「こん」は憎まれている。この対立関係が鈴木三重吉の発見したドラマの骨格である。彼はこの立場から（中略）「こん」と「兵十」との心の交流を示す表現をすべて削除」と、雑誌「赤い鳥」編集者の鈴木三重吉による草稿「権狐」の改稿の位相を分析している。

注二十六『日本大歳時記（夏）』一九八二年、講談社、一五四頁。

注二十七 たとえば一九二二年六月の警視庁令十五号「興業場及興業取締規則」六七条の1には「勸善懲惡ノ主旨ニ背戾スルモノ」とある。

注二十八 「新美南吉記念館」ホームページ、[http://www.nankich.jp/gr.jp/q\\_answer/44.htm](http://www.nankich.jp/gr.jp/q_answer/44.htm)（二〇〇八年九月二七日現在）。

注二十九 佐々木守は「百姓」としている（「『おじいさんのランプ』論」「日本児童文学」一九五九年十二月）。これを受け、大里恭三郎は「作中には、彼を百姓と断定する根拠はない」と否定している（「『こん狐』論——擬人と自然——」（『常葉国文』一九八七年六月）。

（みずさわ・ふじお 本学非常勤講師）